

波茶より静かだった。五月二十七日、海軍記念日だから友軍機が飛来するかと頼みにしていたが希望を絶たれ、二、三日後に識名の壕へと移動し、すぐ患者の付き添いで武富へと患者移送を二回やった。

二回目のときに三時間で行ける路を十二時間も砲弾の中をさまよい、武富に到着したら壕内に入れないぐらい患者が多いのでびっくりした。

識名や武富到着後は、軽傷患者は単独行動を許し、南部後退を勤め、生存見込みのない患者は衛生兵が処置したので患者の数が減少していった。

六月一日の晩、米須小学校の校庭に着き、濡れた衣服や身体を焚火で乾かし、米須、伊原の壕生活に入った。

艦砲弾、榴霰弾、火焰砲などで南部に着いてから戦死者が多数になり心細い毎日であった。

六月二十三日午前、米須小学校前方の壕の入り口は火焰砲でやられ、大きな石が中央部に流れ、ものすごい勢いで燃えつづけ、片方の壕の入り口は米軍が銃で撃って燃えつづけている最中に、石川由紀先生に励まされ同級生一九人は「水が欲しい」と口々に言いながら井戸に向

かってふらふらと歩いている途中に捕虜になった。

同年兵の語る独立山砲第五一大隊

竹市 松義

長崎県（発言順）

山口 満

佐々木 政男

（竹市）

私は大正十一年十一月十九日生れで、三人共昭和十七年徴集です。十八年二月十日に、広島以西練兵場に集合して、軍服から帯剣、雑囊を支給され、市内の兼金旅館で一週間程滞在しました。

戦地へは、下関から釜山まで船で、朝鮮、満州經由で山海関通過が二月十九日でした。

天津―浦口と貨車輸送ですが、どの車両も満杯です。

私は飯あげ（飯、菜、汁等食事の分配を受けに炊事へ行くこと）の時に勤定したのですが、機関車三両、車両七〇でした。補充要員が歩、砲、工……と各料の者で（全

国から来ていました）大変多い人数でした。

浦口から船で南京へ渡り、一泊してから船で揚子江を遼江、夜間だけの航行だから漢口へ着くのに一週間ぐらいかかりました。漢口から西の方へ約五〇キロ漢川という警備地まで徒步行軍です。私は当時から健脚だったので、落伍はしませんでした。私達の現役仲間の約五〇％ぐらいで、初めから独立山砲第五十一大隊要員と決まっていた。部隊の通称号は呂五五二三部隊で第十一軍直轄でした。

（山口）、（佐々木）

そこまでは竹市さんと同じでした。

（山口）

漢川へ着いて各中隊に分かれたのですが、三人共第二中隊で、兵舎は廟でした。そこで初年兵の教育を受けたのですが、内務班も酷しいもので、十五年徴集の人たちの時には、逃亡者や自殺者が出たと聞いています。九州は特に酷いのですから。

独立山砲第五十一大隊の編成については、後でのべますが、元は九州小倉の野戦重砲ですから、下士官や古参

兵は九州出身です。ところが、昭和十六年、十七年徴集者は東北の初年兵です。そのためか、九州の古参兵にやられたわけです。そして、三年目に私たち九州が入った。今度は東北（仙台管区）の人が古参兵というわけで、逆に反動をとられた（笑声）。

（佐々木）

初めは九州の我々と、宮城、福島、新潟の人とは仲々会わなかったけれど、そのうち気持ちも判るようになってた。

（竹市）、（山口）、（佐々木）

我々の部隊史に、独立山砲第五十一大隊の編成のことが書いてありますので大要を読みます。

「我が部隊は昭和二十年十月、小倉に於いて、予備・後備役の召集兵で、野戦重砲兵第五連隊出身者と野戦重砲兵第六連隊出身者の一部を混えて編成された野戦重砲兵第十三連隊でした。

編成完結後、直ちに、石田旅団、橋本欣五郎連隊長に率いられて出帆、遼東半島の大陸に上陸、奉天を経て北支に入り、北京を通過の後、保定から戦闘状態に入り、

石家荘攻略を皮切りに、中支に進撃、南京攻略戦、杭州湾敵前上陸支援を行い、一時、松江に駐留、再び、十三年九月から、盧山攻撃などに参戦、十四年三月から、澄田旅団（後に酒井旅団）大越連隊長統率の下、修水河渡河戦、南昌攻略戦に参加、後、反転して湖江、武昌に至り、中国大陸山岳戦向きに編成替えとなり、同年十月十八日、第十一軍直轄砲兵隊として独立山砲兵第五十一大隊（呂第五五二三部隊）を編成完結。武昌に駐留後、第五十八師団（広部隊）配属となり漢川に移駐した。

部隊員は、九州各県と東北三県出身者を中心に、現役及び補充兵で編成され、中国大陸における陸軍の精鋭部隊である。

その間の戦闘は、北支の石家荘攻略から広西省の百朋街（柳州西南方）に至るまで、その行動範囲は、実に大陸を踏破すること数万キロに及びました。また、その期間には、本隊が、復員した昭和二十一年まで、八年間、大陸の各地を転戦した。」とあります。

（山口）

大隊の編成は大隊本部と二個中隊です。一個中隊は、

九四式山砲二門と、指揮小隊、段列です。乙編成ですから、一個大隊で山方四門です。

（佐々木）

砲は駄載で六頭に分解します。前脚、車輪、砲身、揺架、砲架、後脚ということで、三人で力を合わせて載せるのです。

（竹市）

三分以内に射撃開始出来るよう徹底的に鍛えられるのです。

（佐々木）

段列、爆薬馬は直ぐ射撃出来るよう後をつけてこなければならぬ。

（竹市）

弾薬は一頭の馬に片方に六発、西側で十二発だが、弾にいろいろの種類があるし、十二発では重過ぎるので。

（山口）、（佐々木）

実際にはもっと少なくて積んだ。馭兵は大変ですよ。戦闘が始まる。「山砲前へ」で、馬の行けない所は兵隊が担いでいく。

(山口)

馬は兵器、兵隊は一銭五厘(当時の葉書代金ですが、実際は召集礼状は葉書ではない)で集められるが、馬は大切と言われる。

(佐々木)

馬の蹄には、蹄鉄を打つ、普通の馬は釘が六本ですが、山砲の馬は大きいから、八本から十本打つ。馭兵は一頭に一人ですが戦闘に入ると、馬が入る所迄入る。山に入ると砲を担ぐ。

(竹市)

砲を担ぐのは砲手、砲手は六番までいて。

(山口)

駄馬六頭、馭者六人、砲手六人、他に予備、十二、三人いないと出来ない。弾薬はまた別。

(佐々木)

蹄鉄工務兵もいる。

(山口)

漢川では警備もする。小銃は砲手のみ持つ。

(佐々木)

馬がないと砲は運べない。だから、小休止などの時は大変、馬の手入れ、水汲みが大変。やっと終わると「出発」休む暇など無い。雨が降れば路は泥濘、山道で崖から落ちたら馬は骨折、その補充がつかない。特に作戦中だったらなお大変だ。

(山口)

一般教育は三か月間で、特業教育が三か月間です。それで一応教育は終了です。

(佐々木)

私の特業は馬でした。

(竹市)

私は一般教育三か月のおと、衛生兵となるため、衛生教育を武漢大学で半年間したのですが、大へん酷しかったです。連隊復帰したら常徳作戦で、正月は原隊しました。

(山口)

江南作戦には本隊は行ったが、我々は教育中でした。十八年四月から六月までの間ですが、主力が江南作戦にでている時、初年兵主力で南部大洪山附近の作戦に参加しました。山砲は一門持って行きました。四十人ぐらい

でしたかな。他の部隊、兵科も初年兵が主力です。教育をしながら戦闘したわけで、その時はじめて実弾を射ちました。初年兵の他は助教や助手だったのではないですか、帰ってから第二期の検閲を受けました。

(佐々木)

敵が多くて、帰るに帰れない。本隊が応援に来てくれて敵が引いた。浙江作戦は私たちより古参兵が参加していますので、大洪山脈の時が初陣でしょう。

(竹市)

私の初陣は、常德作戦でした。常德、安郷、浙江、洞庭湖を通過したが、湖は随分広くて、流石に大陸であることを痛感しました。桃源に着くと、広大な蜜柑園であった。この間の戦闘は初めての経験で、友軍の砲撃戦は頼もしいし、勇ましかった。戦闘は勝たなければならぬと、つくづく身に沁みだ。

(山口)

常德作戦中の十八年十一月二十日負傷したが、私は観測にいました。その時、進み過ぎて包囲されて、警部軟部貫通銃創を受けました。山砲が一番前まで進んだのは

始めてです。第三師団の前衛に第一中隊が配属になり、夜陰に乗じて各個躍進しました。駄馬は積んだまま、闇夜にまぎれて、麦畑の中を前の馬について、陣地進入をした。本隊が来る前に陣地進入をと、観測班長が前日負傷しているの、私は班長の乗馬を持っていた。真暗闇のため目印に馬の尻尾に白布を下げていた。二時間近く行軍したところ、敵は、小高い丘から機関銃や小銃弾を雨霰の如く乱射してくる。

私は班長の乗馬「勝久」を引いて、前の兵隊を見失うまいと必死になって走る。初年兵の時の第二次南部大洪山作戦に次ぐ作戦なのでどうにか馴れていました。

それから、どのくらい時間が経ったか、夢うつつの中に乗馬の「勝久」が死にも狂いで引き張っているようです。その時、私は右手を負傷し、警部もやられたのですが、気が付かなかった。小指をやられ、馬の手綱を握っていて、馬に引張られて、奇蹟的に気が付いた。

負傷は夜中の三時頃か、真暗だった。普通なら手綱をはなせば、倒れていて出血多量で死んでいたろう。或いは発見されずに取り残され死んでいたろう。よもや弾

にやられて気絶していたとは思ってもいけない。夢ではな
いかと、つねってみたら痛い。何処をやられたか判らな
かったが、立とうとしても立てなかった。服が血でベト
ベトと濡れている。尻に手を当てたら流石に痛い。両足
が麻痺して全然動かない。この時初めて負傷したと直観
しました。

しばらくして、馬が近くを通ったので、「オーイやら
れた」というと「お前誰だ」と言うので「指揮班の山口」
と返事をしたら、「しっかりしておれよ、助けに来るか
ら」と強く声をかけられ、後で中隊から救助に来てくれ
て、翌日夕方、衛生隊に転送され、二三日して収容さ
れました。

私は急所でなかったので助かったが、腹だったら助か
らなかつたでしょう。その時、歩兵も相当やられた。山
砲の方も残った者は殆どやられた。私は、その点でもお
陰で助かったわけです。

病院では夜間以外は行動出来ない。空襲では随分苦勞
したのです。私が治療を受けたのは負傷した時だけでし
た。病院でも、毎日四、五〇人ぐらいは死んだものではな

いですか。だが私は奇蹟的に救われたわけです。

(竹市)

広西省に入ると、激戦が続いた。迫撃砲が物凄く撃つ
てくるが、くぼ地から撃つので素敵に困っていた。桂林
を包囲した友軍の砲は八〇門だと隊長から聞かされてい
ました。それに対し米軍の空襲がすさまじい。七昼夜に
わたって攻撃したが八日目に陥落した。

私の見た捕虜が二〇〇〇人ぐらい居たらしいが、そこ
を米軍機が誤ってか爆撃して殆どやられたらしいです。

(山口)

桂林攻撃も山砲が敵迫撃砲を破壊もしたし、こちらも
犠牲はあつたろうが、敵の方も随分ひどかつたようだし
た。

(竹市)

桂林周辺は地雷原だった。道は地雷だ池だて歩くこと
が出来ない。

(佐々木)

探知機で探して石灰を撒く、紙だと飛んでしまつて。

(山口)

工作隊や作業隊、それから憲兵隊は密偵を連れて、自分分は糧をしていない。誰も居ない所で死んでも、日本人だとわからないように。

(竹市)

桂林が一番地雷が多かった。馬でも粉碎されてしまい、探しても小さな肉片しか判らない。桂林にはドイツの地雷や、山砲も持って来ていた。城周囲に地雷を沢山埋設していた。

(山口)

中国では公路には、戦車壕が掘ってあるので脇の細い道を迂廻する。そこに地雷が仕掛けてある。夜間行動ばかりだから地雷の被害は増える。桂林飛行場の格納庫は横穴式の洞穴だった。

(竹市)

桂林のことだが、桂林を間近にして、敵迫撃砲弾がものすごく、我々山砲は、山頂に陣地を敷いて、砲撃戦で応戦したが弾薬が不足してきた。わたしは衛生兵であるが、弾薬の運搬を応援した。弾薬集積所の谷間まで下り着いて、弾を自力搬送で担いで、ようやく、やっとの思

いで砲車位置まで運び終わった。その時、迫撃砲弾が落ちたが不発弾で、私は生命が助かった、本当に運が良かった。中隊長以下全員命拾いをして、早速砲撃を開始して、敵迫撃砲二門とも殆ど同時に命中させた。

(山口)

初年兵教育期間中の精神教育が、当時は、何のために軍隊へ来たのかと、涙の明け暮れであった事もしばしばあったが、その試練を乗り越え、精神力によって九死に一生を得ることが出来たことは確かでした。

終戦を迎え武装解除された無念は忘れることが出来なかった。それより、幾多の作戦で苦力を共にした軍馬を、中国軍に引渡すため最後の見送りをしたあの情景は、今も脳裏に焼き付いています。軍馬「勝久」も何処かで死んでしまったことだろう。霊よ安らかに。

(竹市)

山砲隊は、その行軍力の強いことでは、常に歩兵をしのいでいたが、湘桂作戦の間、一年八か月間、後方よりの食糧の補給は無く、食糧確保の行動のため多数の戦死者を出していることは忘れられない。

(佐々木)

今、山口さんも言われたが、私は馬と共に行動した。

馬のことや、戦死した戦友は忘れられないのです。生きて帰ったことは奇蹟というか、幸運というか。